学苑　No. 893　(121)～(125)（2015・3）

「瞬間」の永続――アントニオ・ロペスのリアリズム――

木　下　　亮

はじめに

最近の研究テーマを挙げるとすれば，スペインのリアリズムの画家アントニオ・ロペス・ガルシア（Antonio López García, 1936～　）についてということになる。長崎県美術館からアントニオ・ロペス展開催へ向けて協力を求められ，展覧会の企画と出品交渉，さらには展覧会カタログの学術的な監修とスペイン語翻訳の監修にかかわり，長崎県美術館の学芸員といっしょに合わせて5年間におよぶ準備をおこなったのである。

長崎県美術館はロペスが描いた《フランシスコ・カレテロ》というタイトルの肖像画[1]を1987年に購入しており，日本でロペス作品を所蔵する唯一の公立美術館といえる。黒い服を着た老人の描かれたこの作品は，ロペス25歳のときの1961年に描き始められ，制作期間が26年間におよんだ肖像画である。日本の写実絵画を目指す画家たちの間ではよく知られた作品であろう。

ロペスが現存作家であり，過去の画家や作品を対象とする美術史研究の場合とは異なるため，この画家について調べていくなか，これまでに経験しなかったさまざまな課題と取り組むこととなった。

出会い

初めてロペス作品を見たのは，今から30年以上も前，私のスペイン留学が始まったばかりの頃で，マドリードにあるフアン・マルチ財団の所蔵コレクション展においてだった。その作品を見てどう思ったのかと問われれば，その記憶は曖昧である。3年余りのスペイン留学を切り上げて1984年12月に日本に戻ってきたが，翌1985年の春にラ・マンチャ地方のアルバセテでロペスの個展が開かれ，その展覧会カタログを友人の画家が日本に戻る知人を介して届けてくれた。カタログには46点の作品が掲載されており，画家ロペスについての論考は，マドリード・コンプルテンセ大学で授業を受けたことのあったボネット・コレア教授によるものだった。「このアルバセテのロペス展は，5月の雨のごとし（cae como agua de mayo）」というくだりでその論考は始まっていた[2]。

当時のスペインでは，ロペスは長いこと伝説の画家だった。1961年にマドリードで個展を開催して以降，1985年にアルバセテで展覧会が開かれるまでの24年間，国内でほとんど作品を発表していなかったからだ。その後，1993年5月からマドリードのソフィア王妃芸術センターでロペスの40年間におよぶ創造の軌跡を一望する大展覧会が開かれ，画家の作品が一般の人々にまで広く知られることとなった[3]。このときもカタログの巻頭論文はボネット・コレア先生であった。もちろんその展覧会を見に行くことは叶わず，このとき私にとってロペスはまだ展覧会カタログのなかの画家であった。

日本における受容

ロペスは実は，日本においてまったく未知の画家というわけではなかった。前述のマドリードでの大展覧会の1年半前，1991年9月から日本橋の高島屋デパートにおいて，朝日新聞社主催の「スペイン美術はいま　―マドリード・リアリズムの輝き」というグループ展が開催され，マドリードで制作するリアリズムの画家たちの作品が広く紹介された[4]。アントニオ・ロペスはその第一世代の中心的な画家に位置付けられていたのだ。私の友人の画家は，出品作家のひとりであったばかりか，展覧会の企画のうえでも深くかかわっていたようだった。

続いて日本でロペス・ファンが生まれる契機となったのが，ビクトル・エリセ監督の映画「マルメロの陽光」[5] が1993年に日本で公開されたときだった。アトリエの庭には自ら植えたマルメロの木があり，ロペスがその木にたわわになる黄色い実を半年にわたって描くプロセスを撮影した映画である。その細部にまで神経の行き届いた映像の美しさは比類ないものであった。この映画について文章を書く機会があり，2000年の夏，マドリードに拙稿を届けるためにロペスの娘のマリアを訪ねた[6]。

映画の登場人物であるロペスに対して，いわば「片思い」をしていた時期だったといえる。映像に映し出された絵筆を持つ画家ロペスのイメージは，きわめて日常的でありながら，創作上のさまざまな問題を喚起してくる刺激的なものだった。実際，技巧を凝らした写実に挑む日本の新しい世代の画家たちからロペスへの言及が増えてきて，またモティーフにこだわる精妙な写実絵画の興隆に合わせて，いつしか美術雑誌などにもロペスの名前が載るようになった。

美術史研究との差異

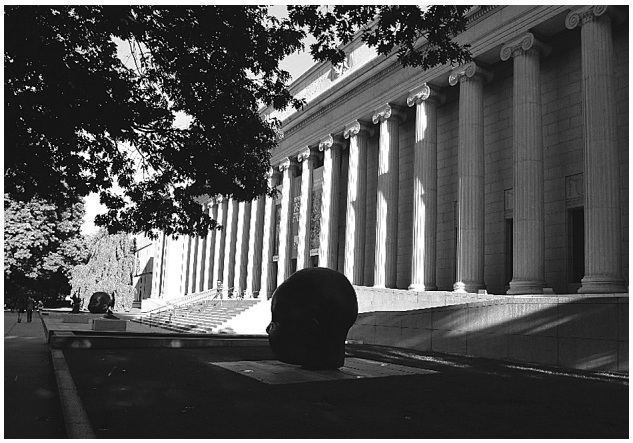
私たちと同時代を生きる画家は，はたして美術史の研究対象になりうるのであろうか。たとえば15世紀後半から16世紀初めに生きたネーデルラントの画家ヒエロニムス・ボス（Hieronymus Bosch, 1450頃-1516）の場合とどう違うのであろうか。大学院生が修論のテーマにボスを選んだために，この2年間この画家について勉強し直したので，例に挙げてみよう。

ボスの生地であるオランダのス・ヘルトーヘンボスに今日まで伝わっているボス関連の文書史料はきわめて限られており，画家の人生も作品の注文の実際も具体的には分かっていない。ボス作品についてはわずかに同時代の目撃証言と断片的な評価が伝わっているだけだが，それにもかかわらず，作品を通しての後世への影響は大きかったことが知られている。ボスの作品はスペイン国王フェリペ2世が16世紀末に熱心に収集し，エル・エスコリアル修道院に所蔵したため，結果的にボスの重要作が今日プラド美術館に展示されているのである。美術史研究ならば，きちんとした文献渉猟のすえに，根拠を示した作品解釈がされなければならない。ボスのような記録の少ない画家でも，できる限りイメージとことばを結びつけることが求められるのだ。

ロペスの場合も同じことである。展覧会カタログの論文，雑誌や新聞の記事，テレビやラジオでのインタビュー，さらにはYouTubeに記録されている動画まで探すことになった。毎年夏，マドリードの国立図書館で，あるいはソフィア王妃芸術センター図書室で，文献検索や文献の複写を繰り返しながら，どこまでロペスに関わることばを探すのか，基準を決めることができないまま優柔不断を続けたのだ。

国際的なロペス評価

長崎県美術館とロペス展の企画を立て始めてほどなく，2008年にボストン美術館で思いがけなくロペス展が開催されることが分かった[7]。3泊4日の強行スケジュールでボストンへ行き，ロペス展を担当した現代美術の学芸員に話を聞く幸運を得た[8]。ニューヨークのロペス作品のコレクターがボストン美術館にそのコレクションを遺贈したことで，ロペス展が企画されたという経緯を知ることができたのである。ロペスがスペインで「伝説の画家」だった時期，ロペスはアメリカに顧客を得ていたのだ。現在のボストン美術館のフェンウェイに面した入口には，このロペス展を機に購入され巨大な頭部の2体のブロンズ像が置かれている（写真1）。《昼》と《夜》と題された幼い女の子の頭部で，それぞれ目を見開いた顔と目を閉じた顔で表され，ロペスが孫娘をモデルにした彫刻作品なのである[9]。

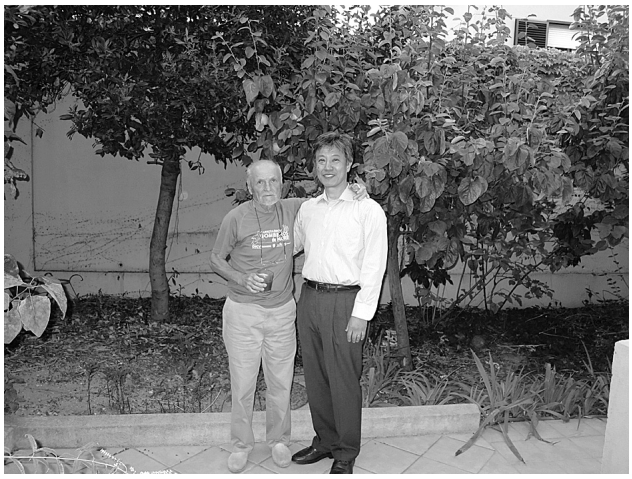


（写真1）《昼》と《夜》，ボストン美術館フェンウェイゲート
（2014年10月，筆者撮影）

さらに2011年にはマドリードのティッセン＝ボルネミサ美術館で大規模な回顧展が開催された[10]。会期中の記録的な入場者数が報じられ，展覧会は成功裏に幕を閉じた。日本でロペス展を開催する意味がしだいに大きくなっていることが実感された。果たして日本でロペスへ相応の評価が得られるのか，改めて自問することになった。

自宅訪問，画家との交流

映画「マルメロの陽光」の舞台となったロペスのアトリエは，マドリード北部のチャマルティン駅にほど近い静かな住宅街にあり，その後，増改築されてロペスの自宅となっていた。初めてロペスを訪ねたときには，目の前の情景に映画のシーンが重なって，不思議な感慨に襲われたことを覚えている（写真2）。



（写真2） アントニオ・ロペスと筆者，マルメロの木の前で
（2012年9月撮影）

ロペスの人生をより深く知るため，生地であるトメリョソも11年ぶりに再訪した。トメリョソはラ・マンチャ地方の中心都市のひとつで，豊かな農作物の集散地として知られている。マドリードの南南東約150 kmに位置し，マドリードから長距離バスで2時間余りかかる。到着するとすぐ，偶然にも地元の市役所の文化部の責任者と知り合い，さらに幸運なことが続き，バスを降りてから2時間後に長崎県美術館所蔵の《フランシスコ・カレテロ》に描かれたモデル本人の旧宅を訪ね，さらにカレテロの姪の知遇も得ることができたのであった（写真3）。

トメリョソはロペスが少年時代までを過ごし，叔父[11]

（写真3） フランシスコ・カレテロ旧宅（左中央の家）
フランシスコ・カレテロ通り，トメリョソ
（2011年9月，筆者撮影）

の勧めで画家の道を歩み始める決心をした生まれ故郷で，大げさに言えば，地平線がぐるりと360度見渡せるような平坦な土地にある。頭の真上に太陽がくると，どこにも身を隠す日陰が見つけられないような農地が郊外に広がっているのだ。夏の強烈な日差しの下では，あるべき固有色の光の波長がまるで異なっているかのようで，影ですら明度を上げて色彩豊かに描かなければならないかのようだった。

徐々にではあるが，画家の人生を垣間見て，プライベートな空間に入り込んでいくことに，一方で素直に好奇心をかき立てられているものの，他方で後ろめたさを覚える自分を感じた。作品の解釈が徐々に変わってきたからであろう。しかし当のロペスは，直截に日常生活と関連させて作品制作について質問をされても，さして気にも留めず些細なことと感じていることが伝わってきた。気難しいところがある画家だと，スペイン人の知り合いの美術関係者から何度も聞かされた。またスペインの友人たちによく言われたのが，お前が日本人だからこそ扉が開かれてロペスに会えるのだということだった。スペイン人同士ではありえないことだというのである。

画家にまつわる言説

ひるがえって日本でのロペスの紹介を検証してみると，ロペス本人に関わる文献はあまりに限られていて，引用できることばがほとんどないことが分かった。加えて20世紀後半のスペイン現代美術を概観するための枠組みも日本ではいまだ提示されていなかった。しだいに責任が重くな

ってきたと感じるようになり，まずロペスにまつわる誇張・憶測・誤解を払拭して，大げさに言えば，偏りのない言説をつくらなければという思いが強くなった。

ロペスは芸術理論を構築し，自らの作品について理屈っぽく語るような画家でない。そこで，ロペスが 2001 年にスペイン北部の都市バリャドリーでおこなった講演の記録（2007 年刊）の翻訳を試みた[12]。彼の芸術に対する考え方を直接伝える手立てが，この講演録のほかに見つからなかったからである。ロペスは本質的に気取りのない，気さくな画家であり，一般市民からも愛される画家といえるだろう。しかし，それだからこそロペスの作品について語る難しさがある。飾らない日常的な口語表現を翻訳することは，本当に骨の折れる作業であった。

ロペス芸術の本質

リアリズムというと，技巧を凝らして，モティーフの質感を本物そっくりに写し取ることに長じた画家を連想するかもしれない。ロペスは，しかしながら写真のように描く画家ではない。写真に撮影されたイメージを，画面に描き写す画家ではない。ロペスの芸術における本質的なもの，それは描く対象とどう向き合うかということであろう。対象と向かい合う時間と描く行為を尊重し，制作においていっさい妥協しないところにある。そして気の遠くなるような長時間，画家は対象を見つめ続け，観者を圧倒するような密度を画面上に達成するのである。

とりわけ 1970 年代から画家が取り組んだ，マドリードの都市景観を描いた大型の作品群は，ロペスの禁欲的な制作態度を直に教えてくれる。市内を見渡すことのできる高所に上り，同じ場所に立ち，同じ光の下でその情景を見つめながら描き続けるのである。つまりロペスは 1 年のある季節の限られた期間，毎日きまった時間帯だけ制作することを，何年にもわたって繰り返していくのである。

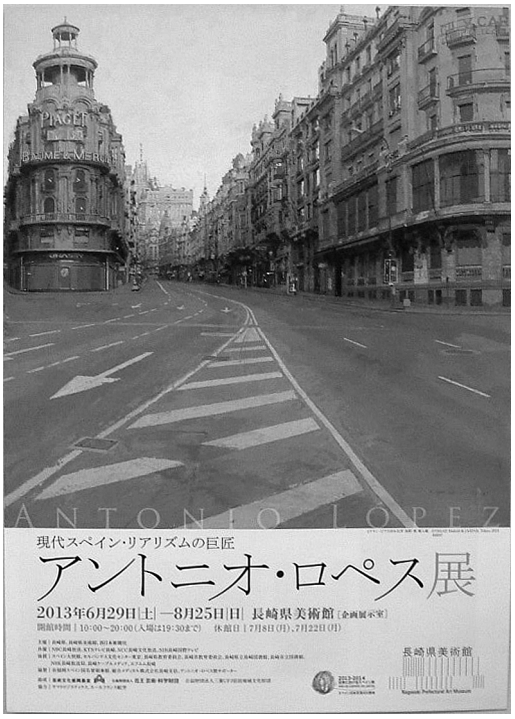
またロペスは油彩ばかりでなく，素描と彫刻を等しく自在に制作する。この 3 つの技法は，互いに補助的なものでもなく，相補的なものでもなく，それぞれが独立した技法なのである。ロペスは油彩，素描，彫刻すべての作品を日本の展覧会で見てもらいたいという望みを持っていて，最終的に 64 作品を借りることができた。

来日

2013 年 4 月，ロペス展は，渋谷の Bunkamura ザ・ミュージアムを皮切りに，長崎県美術館，岩手県立美術館の 3 会場で開催された[13]。このときばかりは，ロペス展のことがテレビ，新聞，そして雑誌などのメディアに正確に取り上げられるかどうか気を配った[14]。

展覧会場が長崎に移った 2013 年の 6 月末，ロペス一家が来日した。ロペスは長女のマリアと孫二人とともに長崎を訪れた。観光にも行かず，ロペスはほとんどの時間を展示室で過ごし，自分の懐かしい作品との再会を楽しんでいた。主催者が開いた料亭での歓迎の夕食会で，ロペスは座敷を見渡した後で，かつてマドリードの目抜き通りグラン・ビアの映画館で見た京マチ子主演の日本映画について語り出した。ロペスにとってその映像が伝統的な日本のイメージだったという。

ロペス一家が帰国した後で，講演会のために真夏の長崎を再訪した。うだるような暑さと湿気のなかで，市内を走る市電のなかに吊るされたロペス展のポスターを目にした。車内で微かに揺れる，マドリードの街並みを捉えた乾いた色のロペスの絵に，不思議と季節との違和感を覚えなかった。



長崎県美術館における「アントニオ・ロペス展」案内

エピローグ

昨年 2014 年の 9 月，マドリードでボネット・コレアと久しぶりに面会できた。老教授は王立サン・フェルナンド美術アカデミー会長となっていた。前の年の日本でのロペス展について報告してから，1985 年のアルバセテにおけるロペス展のカタログのことを話題に出した。老教授が書いた「5 月の雨」とは，乾いた大地に降る慈雨，農作物にとっては待ちに待った恵みの雨のことである。穿った見方をすれば，フランコ体制が終わって 10 年経った当時，新しいスペインのアート・シーンにロペスの作品が発表されたことへの喜びが込められていたのかもしれない。

確かに 30 年前のことになる。1985 年にアルバセテのロペス展のカタログを届けてくれたのも，その 4 年前にフアン・マルチ財団のコレクション展に連れて行ってくれたのも磯江毅というスペインで制作を続ける画家だった。私と同世代だったが，磯江毅は先に逝ってしまった。これまで述べてきたロペス「研究」は，アカデミックなものとはおおよそ言えない生半可のものだが，どこかに磯江の遺志を継いだつもりがあった。今年 3 月下旬から広島県立美術館で磯江の回顧展が始まる[15]。そろそろ磯江が「美術史上の画家」になるような気がしてならない。現存の作家の制作を，自分の体験として言葉に置き換える。これこそ美術史研究者にとって望外の喜びであろう。

注

1 アントニオ・ロペス《フランシスコ・カレテロ》，1961-87 年，油彩・板，91.4×78.2 cm，長崎県美術館

2 Antonio Bonet Correa, “Arte y realidad en Antonio López García” en *Antonio López García* (Exh. Cat.), Museo de Albacete, 1985, s/n.

3 *Antonio López. Pintura, escultura, dibujo* (Exh. Cat.), Museo Nacional Centro de Arte Reina Sofía, 1993. この展覧会カタログに掲載されている作品は，油彩 89 点，彫刻 21 点，素描 60 点である。

4 『スペイン美術はいま　―マドリード・リアリズムの輝き』日本橋高島屋ほか，朝日新聞社，1991 年．出品作家は 16 名で，展覧会は世代を区切って三部で構成され，66 点の作品が掲載されている。そのなかに 10 点のロペス作品が含まれるが，10 番の木彫作品《男と女》はロペスの意思で直前に貸し出しが取りやめとなり出品されなかった。

5 Victor Erice (dir.), *El sol del membrillo*, 1992. ビクトル・エリセ監督「マルメロの陽光」1993 年日本公開。ちなみにこの映画は，1992 年のカンヌ国際映画祭「審査員賞」と「国際映画批評家協会賞」を受賞。そのほかシカゴやモントリーオールの映画祭でも賞を獲得した。

6 木下亮「アントニオ・ロペス・ガルシアと『マルメロの陽光』」『ビクトル・エリセ』エスクァイア・マガジン・ジャパン，2000 年，128-144 頁（紀伊國屋映画叢書 2『ビクトル・エリセ』2010 年，116-133 頁，再録）

7 *Antonio López García* (Exh. Cat.), Museum of Fine Arts, Boston, 2008. この展覧会には 55 点の作品が展示された。

8 Cheryl Brutvan，現在はフロリダのノートン美術館の現代美術担当学芸員兼学芸課長。ボストン美術館のロペス展では以下のロペス論を発表。“Antonio López García”, *Antonio López García* (Exh. Cat.), Museum of Fine Arts, Boston, 2008, pp. 11-51.

9 Antonio López, *Day*, Bronze, 243×200×228 cm, 2008; *Night*, Bronze, 243×200×228 cm, 2008.

10 *Antonio López* (Exh. Cat.), Museo Thyssen-Bornemisza, Madrid/Museo de Bellas Artes, Bilbao, 2011-12. マドリードのティッセン＝ボルネミサ美術館では，約 130 点のロペス作品が展示され，約 32 万人の入場者があった。

11 アントニオ・ロペス・トーレス Antonio López Torres (1902-1987) は，アントニオ・ロペス・ガルシアの父親の弟にあたり，トメリョソ出身の写実画家である。ロペスは自分に絵の手ほどきをしてくれ，さらにマドリードの美術学校で本格的に絵画を学ぶことを勧めてくれた叔父に対し，感謝と尊敬の念を繰り返し表明している。1986 年にはトメリョソにアントニオ・ロペス・トーレス美術館が開館した。

12 Antonio López, *En torno a mi trabajo como pintor*, Valladolid, 2007.（アントニオ・ロペス，木下亮訳『アントニオ・ロペス　創造の軌跡』中央公論新社，2013 年）

13 「現代スペイン・リアリズムの巨匠　アントニオ・ロペス展」Bunkamura ザ・ミュージアム，4 月 27 日-6 月 16 日; 長崎県美術館，6 月 29 日-8 月 25 日; 岩手県立美術館，9 月 7 日-10 月 27 日．展覧会図録，美術出版社，2013 年

14 例えば，NHK 日曜美術館「そこにある永遠　アントニオ・ロペス」(2013 年 7 月 21 日/28 日放送）があげられる。

15 「スペイン・リアリズム絵画の異才　磯江毅展　―広島への遺言―」広島県立美術館，2015 年 3 月 25 日-5 月 24 日

（きのした　あきら　　歴史文化学科）